

有明海佐賀県沿岸域におけるアゲマキの分布状況

津城啓子

Distribution of Jackknife Clam, *Sinonovacula constricta* in the Coastal Zone of Saga Prefecture of the Ariake Sea

Keiko Tsujo

まえがき

アゲマキ *Sinonovacula constricta* はナタメガイ科の二枚貝で、有明海湾奥部では重要な水産資源の一つであった。しかし、1988年頃から有明海湾奥部全域で原因不明の異常斃死が発生し、1994年以降漁獲量は皆無となっている¹⁾。このため、アゲマキ資源回復は緊急の課題になっており、当センターでは、人工稚貝を用いた母貝団地造成を目指し、稚貝の種苗生産技術の開発及び放流技術開発を行い、2001年から七浦地先を中心に放流している。一方、アゲマキの異常斃死が確認されて以降、有明海佐賀県干潟海域においてアゲマキの生息状況の確認は行われていない。そこで今回、アゲマキの種苗放流効果を検証するため、2006年から2010年に当海域におけるアゲマキ分布状況を調査したので報告する。なお、本調査の一部は、水産庁補助事業「有明海漁業振興技術開発の一環」として行った。

調査はアゲマキ漁に精通した漁業者により大潮の干潮時に行った。

材料および方法

調査は、2006年9月、2007年6月～8月、2008年7月、2009年6月～8月、2010年6月～8月にかけて実施した。

実施場所は、2006年は、北鹿島地先、2007年は、広江地先など3地点、2008年は、広江地先など5地点、2009年は、大詫間地先など7地点、2010年は、芦刈地先など7地点を選定した(図1)。調査を行った地先の地盤高は、3～4mの範囲で行った。

発見したアゲマキは採捕し、当センターに持ち帰り、

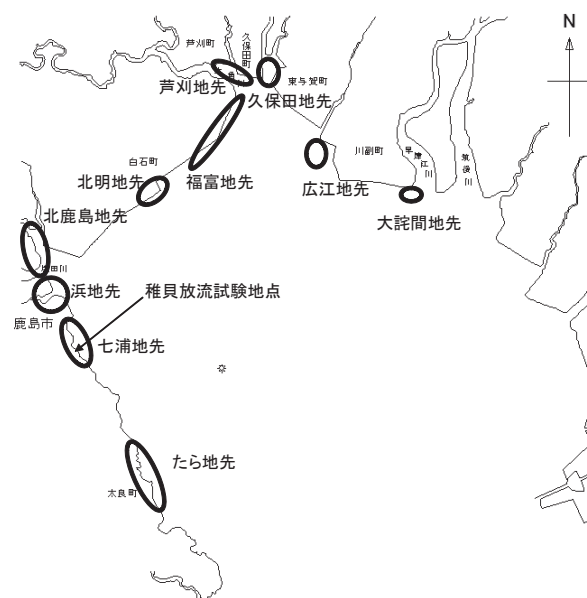


図1 調査地点図

殻長等を測定した。また、発生年級は、採捕月が6月と7月であることから、吉本^{2,3)}、大隈⁴⁾、津城ら⁵⁾の報告より、殻長30～55mmの個体は当才貝、殻長が60mm以上の個体は1才貝以上の貝と推定した。

結果および考察

地先別の実施日、調査地点数及び採捕個体数を表1に示した。アゲマキは、2006年は本調査では採捕されなかった。2007年7月に芦刈地先で1個体、2008年7月に七浦地先で24個体、2009年は、北鹿島地先5個体、浜地先4個体、七浦地先76個体、2010年は、芦刈地先1個体、北鹿島地先2個体、浜地先5個体、七浦地先4個体を確認した。

アゲマキが採捕された地点を調査年ごとに図2に示し

表1 2006～2010年までの地先毎の調査地点数および採捕個体数

調査年月日	地先名	調査点数	採捕個体数
2006年9月1日	北鹿島	9	0
2007年6月29日	広江	5	0
2007年7月3日～20日	芦刈	4	1
2007年8月24日	北鹿島	5	0
2008年7月4日	広江	7	0
2008年7月6日～23日	芦刈	6	0
2008年7月14日	浜	2	0
2008年7月28日	北鹿島	6	0
2008年7月14日	七浦	5	24
2009年6月5日	広江	7	0
2009年8月17日	大詫間	6	0
2009年6月24日～25日	久保田	7	0
2009年6月19日～7月23日	芦刈	3	0
2009年7月17日	北鹿島	7	5
2009年7月6日～7日	浜	6	4
2009年7月10日	七浦	6	76
2010年6月14日	芦刈	4	1
2010年6月11日	福富	6	0
2010年8月20日, 31日	北明	6	0
2010年7月2日	北鹿島	5	2
2010年6月17日	浜	6	5
2010年6月14日	七浦	6	4
2010年8月11日～25日	たら	6	0
2010年8月20日, 31日	北明	6	0
	合計	130	122

た。2007年は芦刈地先で1箇所、2008年は、七浦地先にて4箇所、2009年は北鹿島地先から七浦地先において9箇所、2010年は5箇所採捕された。多くの個体が採捕された、北鹿島地先・浜地先・七浦地先に限ると、2008年は七浦地先だけ、その後、2009年および2010年には七浦地先から北鹿島地先で確認され、採捕される範囲が七浦地先から北鹿島地先に向かい広がっているように推察された。

2008年から2010年の間に北鹿島・浜・七浦地先で採捕されたアゲマキの殻長組成をみると図3に示すよう

に、いずれの年も当才貝と1才貝以上の貝が含まれており、この周辺では前年に発生した個体が、1才貝以上になるまで生息していたものと考えられた。また、この調査を依頼している漁業者から、浜地先にて2010年に殻長が70～80mmの個体を採捕したとの報告があり、後日、調査したところ、殻長が70～80mmの個体を採捕した。このことから、2007年、2008年に確認された当才貝は、2010年においても、生息していたと考えられ、前述の結果を裏付けているものと考えられた。

2008年からアゲマキを確認している七浦地先は、2001年から稚貝放流を継続して実施している地点である。この地点の放流個体は、組織学的に放卵・受精していることを確認している⁵⁾。天然資源が殆ど確認されていないなか、放流種苗が再生産に寄与している可能性が考えられ、母貝団地として一定程度機能していることが示唆された。このことから、人工稚貝の放流は、母貝団地の造成につながり、更には、アゲマキ資源回復の一方策となりうると思われる。今後、当海域全域でアゲマキ資源を回復させるためには、他の地先においても種苗を放流する必要がある。

文 献

- 1) 吉本宗央 (1998) : 九州沿岸域の主要漁業種の資源の現状と問題点 有明海湾奥部におけるアゲマキ資源の変動. 水産海洋研究, 62(2), 121-125.
- 2) 吉本宗央・杠 学・中武敬一 (1986) : アゲマキの生態-III - 湾奥西岸域における分布の一例と形態, 成熟について. 佐有水研報, (10), 17-34.
- 3) 吉本宗央, 首藤俊雄 (1989) : アゲマキの生態-IV 客土における養殖アゲマキの成長・生残と漁場底質の改善. 佐有水研報, (11), 39-56.
- 4) 大隈 斉・江口泰蔵・山口忠則・川原逸朗・伊藤史郎 (2003) : 有明海におけるアゲマキ人工種苗の成長と成熟. 佐有水研報, (21), 45-50.
- 5) 津城啓子・大隈 斉・藤崎 博・有吉敏和 (2009) : 有明海におけるアゲマキ人工種苗の成長と成熟-II. 佐有水研報, (24), 1-4.

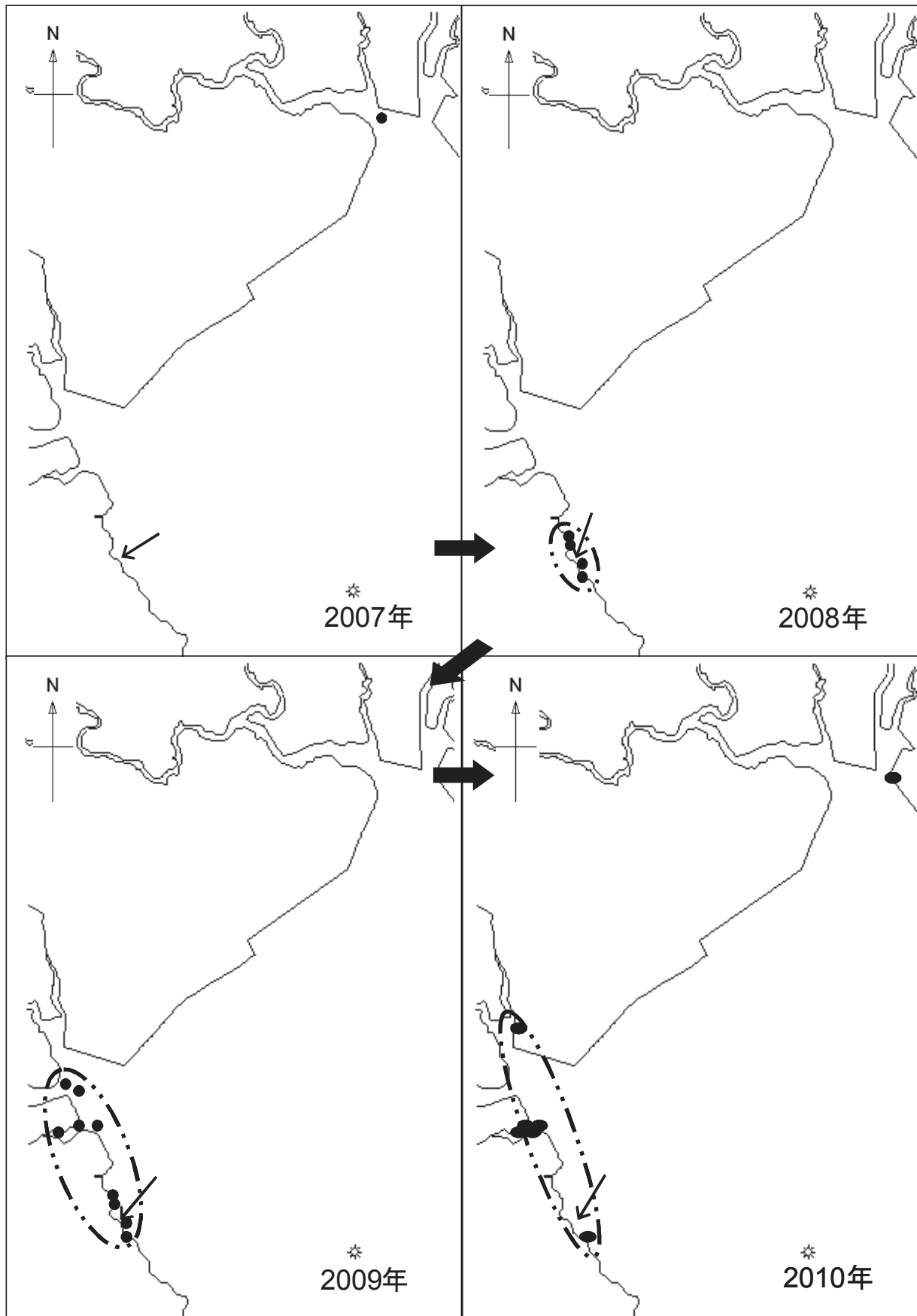


図2 アゲマキ採捕地点の年変動
 ●：採捕地点、←：稚貝放流試験地

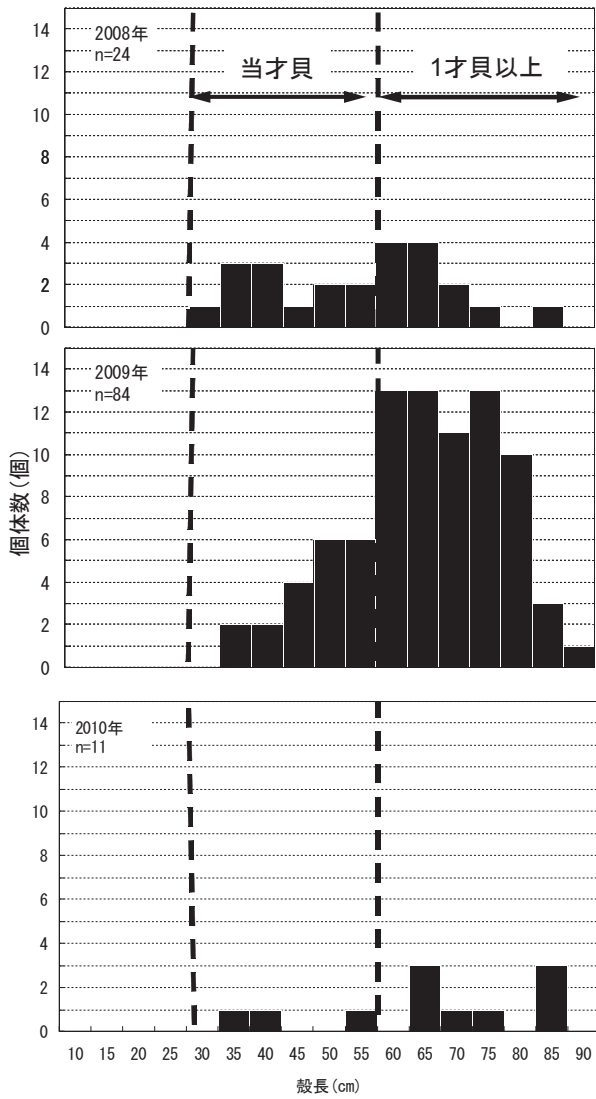


図3 北鹿島・浜・七浦地先における採捕アゲマキの殻長組成の変動